

銀笛の夜

ぎんてき

水城嶺子



銀
笛
の
夜

水城嶺子

角川書店

銀笛の夜

平成三年五月三十一日初版発行

著 者 水城嶺子

発行者 角川春樹

発行所 株式会社角川書店



東京都千代田区富士見二一三三

千102 振替東京三一九五二〇八

電話／営業部〇三三三八七八五二一

編集部〇三三三八二七八四五二

印刷所 暁印刷株式会社

製本所 株式会社宮田製本所

落丁・乱丁本はご面倒でも小社通信販売課宛にお送りください。送料は小社負担でお取り替えます。

©Printed in Japan ISBN4-04-872644-7 C0093

水城嶺子（みずきれいこ）
一九六〇年、大阪生まれ。
同志社大文化学科卒。料理
書編集の傍ら書いた『世紀
末ロンドン・ラブソディ』
（角川書店刊）で第十回横溝
正史賞優秀作を受賞しデビ
ュー。

¥1400 (本体1359)

銀
笛
の
夜
／
目
次

10	浅草へ	92
9	王崎邸でのごきごき	85
8	さまよえる猶太人 ^{ユダヤ}	77
7	宗方予爵邸でのアフタヌーン・ティ	67
6	尋問の後で	57
5	上野の杜の乙女達	51
4	桜木天神	39
3	銃声	35
2	春の夜が更けて	23
1	大正銀座モダニズム	5

20	19	18	17	16	15	14	13	12	11
あとがき	赤い月	奈々子の死	雪の果て	思いがけない色々なこと	赤い石	隅田川トースト供養	ピアノを弾いて	愛玉子 オキヨウシ	春や春 春南方のローマンス
224	213	194	181	165	149	143	129	106	100

装丁 鈴木洋介
装画 林 静一

Ⅰ 大正銀座モダニズム

勢いよく閉じかけた細巻きのこうもりが、柳の枝に当たって、銀色の雨の雫がばらばらと落ちてきた。

「わっ……ごめんあそばせ」

どうしてわたしは、時々、こう粗忽なことをしてしまうのかしらん、と情けなくなりながら、おろおろと謝る朱里に、柳の下から飛び出した小さな丁稚は、前歯の欠けた顔でにと笑ってみせた。

「ごめんなさいね」

紺のやたらじまに木綿の角帯を締めた後ろ姿が、カフェ・ライオンの角を回ったのを大いに反省しつつ見送って、朱里は、尾張町の西側を歩き始めた。

大正九年三月。春の雨が通り過ぎた後の銀座通りは、赤煉瓦の艶も、柳の緑もしつとりと深みを増して、遠い、まだ見ぬ欧羅巴の街を彷彿とさせる。やわらかく湿った風の中に、白檀や沈香の香りが、ほのかに匂い立っているのは、鳩居堂から漂ってくる香りのせいだろうか。朱里は、中をのぞいて行きたい気持ちを押さえて、先に進んだ。

下駄の栗原、もすりんのやまさん、名前からして厳かな薬品店、ブレッツ・ホスピタル・ファーマシーの前をゆっくり歩き、更に行くと、煙草の菊水。はいから紳士が、外国製のしゃれたシガレットを買っていく店だ。それから、白木屋の馬車を見送って竹川町に入ると、食料品の相模屋に、やはり、新しものの好きの男性達が、たいてい覗きたがる写真屋の金城商会……機械類に、んで興味が無い朱里は、さっさと前を通り過ぎ『黄金の滝』で有名な筑紫堂、蝶々屋の絵葉書を横に見て通りを渡り、ようやく目的地に着いた。出雲町の角に立つ、資生堂である。

ウインドウにちらりと目をやってから、ゆっくりと中へ入り、アメリカから取り寄せたという自慢のソーダ水製造機の方に歩いていくと、そばにいた十七、八の少年給仕が、素早く頭を下げた。

「待ち合わせですの」

朱里は、そう言って、店内をざっと見回した。

いつものことながら、この時間のソーダファウンテンは、稽古帰りの新橋芸者や、はいから紳士、淑女で華やかな賑わいを見せている。

「いらっしやいますか……?」

「ええ……」

奥の席に佐伯尊任さあき たかしの背の高い姿が見えた。ゆったりとしたミッドナイトブルーのスーツに、短い両前のジレ、少年期を欧州で過ごしたからだろうか、特に美男子というわけでもないのに、日本人にしては珍しいほど洋服が似合う。

「ああ、いましたわ」

朱里は、あそこです、と言いかけて、ん？ という風に笑った。

椅子にもたれて両切煙草をくゆらせている尊任の視線が、新橋のきれいどころの方へさまよっている。見ると、姐さんねえふたりに連れられたかわいなおしゃくが、あだっばい視線を送っているのだ。年の頃は、十三、四、湯帰りらしく、か細い首に襟白粉おしろいを真っ白に塗って、扇子をばたばたもてあそんでいる。ぱっちりとした黒目勝ちの目といい、筆で描いたような小さな小さな口元といい、まだほんの子供のあどけなさなのに、仕草だけは、一人前に色っぽい。

朱里は、彼女の幼い媚態びたいにつくづく感心して眺めいった。

一方、肝心の流し目を送られている当人の尊任の方はというとその逆で、小さな娘の年に似合わない様子に色気よりもむしろ、痛々しさを感じて、そっと視線を端の方へと移してしまっていた。その先にいたのは、三田の学生らしき四人連れである。学生服が三人、袴姿はかまざがひとり、店内の美女達を眺めながら、あれこれ話しこんでいる。いささか姿勢がぎこちないのは、お目当ての美女の目を意識してのことだろう。日頃、殺伐とした生活をしているこの学生達にとって、ここは、

憧れの欧羅巴の香りがするコーヒーやソーダ水に、美しい女性達がセットになった、桃源郷のような場所なのだ。

「不自然だなあ」

尊任は、彼らを見ながら、つい、つぶやいた。十五歳から十八歳を遠い維納^{ウィーン}で自由気ままに過ごしたこの青年には、若い男女の学生が、ごく自然に平気で並んで歩けない日本という国が、どうにも窮屈で仕方がなかった。

維納とは、何という違いだろう——尊任の頭の中に、向こうの音楽学校での思い出が鮮やかに蘇ってきた。

そうだ、あの古い都には、学生ならではの楽しみが山ほどあった。ビアールと腸詰めだけで何時間も居座ったカーレンベルクのケラー、夏のノイジードラー湖でのピクニック、ドナウ川のほとりで開いたささやかな演奏会、そして、冬の夜のワルツ。そういう時、僕達の周りには、いつも、色とりどりのドレスを着た美しい娘達が、まるでかわいい蝶々のようにひらひらと飛び回っていた……。

「お待たせいたしました」

尊任は、急に物思いから覚め、声のする方へものうげに顔を上げた。

「バナラソーダでございます」

給仕が、資生堂自慢の美しい舶来グラスを銀盆に載せて立っていた。薄いクリスタルの中でかすかに金色を帯びたバナラソーダが冷たく泡立っている。

「ありがとう」

手際よく置かれたグラスに、これもまた舶来もののストローをさしこんで一口飲んだ尊任の目に、ほどなく、銀鼠ぎんねずみに吹雪のように桜を散らしたちりめんに、遠菱ととおげし文様の帯を山の手のお嬢さんには珍しく、お太鼓に締め、六寸幅の薄紅色のリボンを結んだ朱里の姿が、こちらに向かって歩いてくるのが見えた。

濃い眉の下から、冴え冴えとした切れ長の目が、少し笑いを含んでまっすぐにこちらを見上げている。美人というには、肩の線が堅すぎ、唇が平らすぎ、おまけにいささか知が情よりも出過ぎた顔だが、立っていると、なんとなくふわりと美しい空気に包まれているように見える。そんな女だ。

軽く手を振ると、きりっとした口元から白い歯がのぞいた。名前は、檜堂かいたどう朱里、二十一歳。東京音楽学校の二年生である。

東京にも、維納の生活より魅力的なものが一つだけあるかもしれない——尊任は、そう思った。(……ただし、どこがかは、よくわからないんだよなあ……あのお嬢ちゃんとは、対照的だ)

そう思っ、さっきのおしゃくの方を盗み見ると、向こうでも気がついて、かわいい口元をつんととがらせた。その目が、たいしてきれいでもないじゃない、と言っている。

「お待たせ」

朱里は、欧羅巴風に立ち上がり、迎えた尊任に会釈して座った。

「何にする？」

「そうね、バニラアイスクリームを」

「かしこまりました」

頭を下げた給仕がテーブルのそばから離れると、朱里は、突然、尊任の方にすつと身を乗り出してささやいた。

「かわいいわね」

「今の？」

驚いて、引き下がっていく給仕の後ろ姿を追う尊任を見て、朱里が、笑い出した。

「違うわよ。あのおしゃくのこと」

目が、いたずらっぽく光っている。

「ああ、あのおしゃくね」

尊任は、肩をすくめてそっけなく言った。

「君の方が、きれいだ」

「あのねえ」

朱里は、半ばあきれ、半ば気を悪くした顔で尊任を見た。

「以前から一度言おうと思ってただけど、どうしてそう平気な顔してつるつるとお世辞をおっしゃるのかしらね。外国にいらしたせいかもしれないけど、あんまり度が過ぎるのは、誤解を生む元よ」

「お世辞じゃないよ」

きれい、と言って抗議されるとは夢にも思わなかった尊任は、驚いて打ち消したが、朱里は、首を振った。

「わたし、この年までそんなこと言われたことないもの」

「それは、周りが日本人だからさ。実際、日本人は、褒めるということをしなさすぎるんだ。僕自身、維納に行く前は、そうだったから、偉そうなこと言えないけど。でも、向こうで、これじやいけない、と反省したんだ」

「で、褒めることになさったわけ？」

「そう、良いことはね。その方が、僕の性格に合ってるんだ」

「ええ、確かに人を褒めるのは、いいことだわ。でも、相手を選んでくださらなくちゃあ。わたしみたいに褒め言葉に縁遠い人間は、よけいみじめになるわ」

「嘘だよ。僕はいつも君のことを褒めてるじゃないか」

「……才能のこと？」

朱里は、急に低い声になった。

「あ、またそういう顔をする。この話になると、いつもなんだよねえ」

尊任は、目の前のバニラソーダを押し退けて、朱里の顔をのぞきこんだ。

「才能があるって言われて、なんでしょげるわけ？ 何度も言うようだけど、僕は、音楽学校で一番才能があるのは、王崎奈々子おうさき ななこなんかじゃなくて、君だと思ってる。君に必要なのは、度胸と
思いこみだけだよ」

「……………」

朱里は、この話になるといつもそうするように、平たい唇の端でちょっとほえんだだけで、何も答えようとはしない。尊任は、もう何度も経験しているこの展開を、今日こそは打開しようとして、素早く煙草の火を消し、両手をテーブルの上で組み合わせた。そして、

「僕はね」

と言いかけたのだったが……その時、例の学生達が陣取ったあたりから、嘆声ともささやき声ともつかぬものがざわわっとあがって、肝心の朱里が、そちらに目をそらしてしまった。

「あら、尊任。噂をすれば、奈々よ」

朱里の声が明らかにほっとした色を帯びているのに気づいた尊任は、急に続きを言う気をくじかれ、ため息まじりに言葉を飲み込んだ。そして、しぶしぶ彼女の視線を追うと、確かに、噂の王崎奈々子がこちらに向かってくるのが見えた。

それは、三田の連中が、色めきたつのも無理はない女だった。

黒ビロードのリボンがふわりと飾られた赤いフェルト帽を茶色がかった美しい目の上、ぎりぎりにかぶり、オーガンディの襟がついた赤いタフタのドレスを着ている。乳白色のガラスのように透き通った肌にさらさらとかかる栗色の髪は、信じがたいことに、うなじのところまでしかない。音楽学校でも問題になった「断髪」である。

王崎奈々子は、仏蘭西好みの父親が、向こう風にと意識してつけたその名にふさわしく（だから、彼女は、奈々子さん、ではなく、奈々と呼ばれていた）西洋人形のように華やかで、現実味

のない美しさを持っていた。

「ああいうのを美しい、と言うのよ」

と朱里が、ささやいた。

尊任は……残念なことに、妙なところで正直な上、美しい女には大層弱い尊任は、今度ばかりは、「君の方が——」と言えず、観念して、その通りだ、という顔をした。

「ごきげんよう、奈々。最近、学校でもお見かけしないから、どうしてらっしゃるのかと思ってたわ」

「そう……。ここところ、忙しくて。正直言って、学校なんか行ってる暇なかったの」
奈々子は、なんとなく含みのある言い方をした。

「そう？ あ、ごめんなさい。気づかないで。お座りにならない？」

「あら、ありがとう、朱里。じゃ、ちょっと失礼するわ。実は、わたくし、お二人に用があるの。
尊任、そんな顔なさらないで。大丈夫、長くはお邪魔しませんことよ」

奈々子は、朱里の薦めた椅子に腰を下ろして優雅に足を組み、尊任にはほえみかけた。

「とんでもない、いつもながらにお美しい、と思って見とれてたんだよ。見てみたまえ、連中も、みんなこつちを窺^{うかが}ってるよ」

確かに、尊任の言う通り、学生達のはほとんどがこちらを見ていた。中には、尊任の顔をにらんでいる者もある。

「うわー、にらまれてるよ。美人を二人も連れてると何かと恨みを買うなあ」

首をすくめた尊任を見て奈々子が艶然と笑った。

「お気をつけ遊ばせ。音楽学校の生徒とわかったら、また色々やこしくなつてよ」

奈々子が、こう言つたのも無理はなかつた。当時、東京音楽学校というのは、世間からいわゆる「不良」の巣窟と見なされていたのである。これは、ひとつには、一般庶民の中に、まだ音楽家というものを卑しむという、江戸時代そのままの感覚が残っていたからであり、もうひとつには、男女共学のためだった。

「まったく不健全だよなあ」

「何が？」

唇をゆがめてつぶやいた尊任に、朱里が聞いた。

「この国がだよ。若い男女が、平気で肩を並べて歩けないなんて、どう考えても健全じゃないよ」

「あーら、あなたは、そんなこと意に介せず、しょっちゅう女性と出歩いてらっしゃるじゃないの。現に今だって」

奈々子が、コーヒーをかきまぜながら、からかうように言う。

「当然だよ。この国の悪習に染まる気はないからね。でも、それには、人知れぬ努力が必要なんだよ。女性と歩く時は、学生に見えないように気をつける、とかさ。特に、君の言う通り、間違つても音楽学校の生徒には見えないようにね」

奈々子は真面目くさつて首をかしげ、尊任を見詰める振りをした。